

卑劣な耳

上

佐野 洋



卑劣な耳

佐野 洋

江苏工业学院图书馆

藏书章



卑劣な耳「上」

一九九一年六月三十日

初版

著者

佐野洋

企画・協力

柳佐野洋企画

発行者

山本功

印刷

光陽印刷

製本

小泉製本

発行所

株式会社 新日本出版社

〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷四の二五の六

電話 (〇三三) 三四二二一八四〇二(営業)
(〇三三) 三四二二一九三三三(編集)

振替番号 東京三一一三六八一

落丁・乱丁がありましたらおとりかえいたします。

本書の内容の一部または全体を無断で複写複製(コピー)して配布することは、法律で認められた場合を除き、著者および出版社の権利の侵害になります。小社あて事前に承諾をお求めください。

卑劣な耳「上」 目次

知らない投書	5
盗まれた声	41
暴かれた名前	87
上司の指示	129
政治的結着	170
肩代りの組織	223

卑劣な耳〔下〕

記事の裏側

偽りの肩書

留守番電話の意味

新たな疑問

録音された声

苦しい演技

カバー・扉装画 森 秀雄

卑劣な耳

〔上〕

知らない投書

1

どんな新聞にも投書欄がある。しかし、読者の何パーセントが、それを読んでいるのだろう。ほとんどの人は、このページにまで目を通さないのではないか。そんなことを考えた記憶が、柳瀬^{せせ}^{えいこ}^こ^こにはある。

それは、たしか、いまのアパートに移って間もないころのことだった。

引越したことを郷里に知らせたところ、母親が様子を見に出て来るという。それで、冴子は
大掃除に取りかかった。

一番苦勞したのは、ガラス拭きであつた。前の住人が、ガラスにポスターなどを貼る趣味を持つていたらしく、あっちこちに、糊の跡がついている。濡れ雑巾を使ってどうにか落としたが、今度はその雑巾の跡が気になった。

いい方法はないかと、友だちに電話をかけたところ、ガラスの掃除には古新聞が一番いい、と

教えてくれたのである。

『本当？ どうして？』

と、冴子は聞いた。

『どうしてなんて、あたしだって知らないわよ。でも、母に言われてやってみたら、とても具合がよかったの。だから……』

新聞の投書欄に気がついたのは、そのガラス拭きのときであった。

新聞を丸めようとした冴子の目に、『いんちき痩身法』という活字が飛び込んで来た。

彼女はそう太っている方ではないが、やはり体重は気になる。もう少し痩せようかな、と考えていたところだったから、痩身という言葉に敏感だったのだろう。

その投書は、五十二歳になる医者が書いたもので、あるタレントが書いた痩身法の本には、医学的に見ていくつかの危険が含まれている、という指摘がなされていた。

へえ、そうなの……、と冴子は思った。でも、この記事にどれだけの人が注意するだろうか……。よっぽど暇な人でなければ、新聞の投書欄などに目を通さないだろうに……。

冴子がそう考えたのは、彼女自身があまり新聞を読んでいるからでもあった。

彼女のアパートは、木造の二階建てだったから、新聞は各戸に配達される。

それで、冴子の一日は、朝起きてすぐ新聞受けから朝刊を取りだすことで始まる。しかし、新聞をじっくり読むという習慣は、彼女にはなかった。

一応社会面は開くが、それも見出しにざっと目を通すだけ。あとはテレビ欄の載っている最後

のページを拡げて、その夜見るテレビ番組を調べる……。

友だちに聞いてみると、だいたいの方がそんな具合だった。

新聞の投書欄をそんな風に考えていた冴子だったが、その考えを改めざるを得ないような事態がやがて訪れて来た。一九八七年八月七日金曜日のことである。

その日の正午近くであった。冴子は、会社で、ある書類を別の部に届けるように命じられた。二年前に短大を出て、いまの会社に入ったのだが、そのあと女子の新入社員が、どういうわけか同じ課に配属されて来ない。そのため、彼女の名前は、いまだに名簿の最後に載せられており、雑用はたいいてい冴子に押し付けられるのであった。もっとも、冴子自身は、そのことをさして不満に思っていないかった。責任のある仕事を任されれば、勢い残業も多くなるだろうし、アパートに会社の仕事を持って帰り、夜遅くまでそれに取り組むようなことにもなるだろう。それよりも、いまの方が楽でいい……。

命じられた書類を届け終わり、階段を上がろうとしたとき、

「ああ、柳瀬君」

と、後ろから呼び止められた。

振り返ると、企画一課つまり冴子が所属している課の村木課長だった。

「ああ、もう会議は終わったのですか？」

と、冴子は言った。この日午前中に課長会議があることは、彼女も知っていた。

冴子にとって、村木は嫌いな上司ではなかった。もう四十は過ぎているはずだが、中年太りの

傾向は現れていないし、服装の趣味も悪くない。そして、冴子は彼から直接叱られたこともなかった。

だからこそ、気軽に『会議は終わったのですか』というような質問ができたのかもしれない。

と言って、村木は部下を絶対に叱らないというわけでもないらしく、男性社員が、

「きのうは、課長にどやされたよ」

などと言っているのを、小耳に挟んだこともある。

「いや、トイレなんだよ」

会議が終わったのかという冴子の質問に、村木は、笑いながら答えた。「出て来たところ、柳瀬君を見かけたので……」

「はあ……」

冴子も愛想笑いをした。だが、村木の意図がわからず、不気味でもあった。これまで、こんな具合に彼から声をかけられたことはない……。

「ところで……」

冴子の当惑に気づかないのか、村木はそのまま言葉を継いだ。「柳瀬君は『とういん』なのかね？」

「え？ 何でしょうか？」

村木が口にした『とういん』という言葉の意味が、冴子にはわからなかった。

「いや、共産党に入っているのだろうか？」

「共産党ですか？ いいえ」

冴子は、首を振った。

「ふうん……。すると、ただのシンパというわけか……」

「シンパって……」

それも冴子には、理解できない言葉であった。

「いやいや……。まあいい……」

村木は、そう言くと、手を振って会議室の方へ歩いて行った。

2

しかし、冴子は村木課長の言葉を深くは考えなかった。自分には何の関りもないことを質問された、という感じだったから、考えようがなかったのでもあった。

もちろん、共産党という政党があることは知っていたが、それがどんな政党なのか、彼女はまったく関心を持っていなかった。そして、少なくとも、二十二歳の今日まで、それを知らないために、困ったということとはなかった。

ところが、その日の夜、冴子はまたその言葉を電話で聞かされた。

電話がかかって来たのは、九時ちょっと過ぎ、彼女がアパートに帰った直後であった。

帰宅がそんな時刻になったのは、同期入社社の社員で作っている『FF会』の例会があったためだ。『FF』というのはファースト・フライデーつまり第一金曜日の略で、毎月その日の夜に、

同期の仲間が集まって酒を飲みながら話し合うのである。

その会合のときも、冴子は村木から言われたことを、だれにも話さなかった。別に秘密にしたわけではなく、彼女の意識から、そのことが脱落していたのであった。

五時半に始まった会は、七時ごろには終わったが、冴子はそのあと二次会に一時間ばかり顔を出してから帰った。

FF会のメンバーの中に、冴子が好意を持っている男性社員がいる。副島俊介そえじまとしすけという名で、年齢は冴子より三歳上だった。二次会には、副島も当然出席するだろうと思って行ってみたところ、彼の姿は見られなかった。それで、二次会の途中で抜け出し、アパートに帰ったのであった。

アパートに帰り、ハンドバッグをベッドに放り投げ、着替えに取りかかろうとしているときに、電話のベルがなった。

「はい、柳瀬です」

と、冴子は電話に出た。

「ああ、やっと掴まえた。共産党の女は、夜遅くまで遊び歩くらしいな」
受話口から聞こえて来たのは、妙に籠もった男の声であった。

「もしもし……」

と、冴子は呼びかけた。間違い電話だろうと思った。「どちらにおかけですか？ 柳瀬ですけれど……」

「知っているよ。柳瀬冴子さんだろう？ 職業はOLで共産黨員……」

「え？ どちらさまでですか？」

冴子は、聞き返した。昼間村木課長に言われた言葉を思い出した。どうも単なるいたずら電話ではないようだ。

「どちらさまで、おれのことかい？ 名前を名乗るほどの者じゃないよ。しかしね、あんた、余り警察の悪口を言うのはよした方がいいよ。あんたたち若い女の子が、夜遅くまで遊んでられるのも、警察がしつかりしているからなんだ。それとも、あんたは警察がもっとだらしない方がいいのかね？」

「もしもし……。何を言いたいのですか？」

冴子は、ドアに鍵がかかっているのを確かめながら聞き返した。

冴子のところにも、よくいたずら電話がかかって来る。そういうとき、冴子はすぐに電話を切ったりせずに、

「あたしの兄貴は刑事なのよ。この電話には逆探知装置がついているのですからね。それでもいいの？」

と、相手をおどかすことにしている。しかし、この電話は、普通のいたずら電話とは、ちよつと様子が違う……。

「何って、いま言ったようなことさ。いざと言えば警察の助けを求める癖に、その警察の悪口を言うなんて、もつての外だ。そう思ったのね。とにかく、出しゃばったことはしないことだ」
「もしもし、あなたは……」

冴子は、そう呼びかけたが、相手は電話を切ってしまった。

いったい、これはどういうことなのか。冴子はベッドに腰を下ろして考えた。

昼間の村木の言葉と言い、いまの電話と言い、冴子にはまったく見当がつかない。しかし、二人とも『共産党』という言葉を口に出しているのだから、互いに何らかの関係はあるのかもしれない……。

村木に聞かれたときは、あまり気にしなかったのだが、見ず知らずの男から、あんな風に言われると、気味が悪くなる……。

そのとき、またベルが鳴った。

冴子は、反射的にベッドから降り、電話機に走り寄った。

「はい、柳瀬です」

「柳瀬冴子さんだね？」

こんども男の声だった。ただ、先刻の男とは違うようだ。

「……」

冴子は黙っていた。予感めいたものがあつた。

「新聞を読んだよ。ずいぶん偉そうなことを言っているじゃないか」

「新聞ですか？」

と、冴子は聞いた。

「ああ、中央日報だ。あれ、あんた自身の考えじゃなく、だれかに言われて書いたんだろう？こっちは、ちゃんと知っているんだ」

「もしもし、中央日報に何かあたしのことが出ているんですか？」

「白ばつくて……。ちゃんと『大田区・柳瀬冴子』とあんたの名前が書いてあったじゃないか。あんた、大田区に住んでいるんだろう？」

「ええ……。でも……」

「とにかくだな。何も知らないくせに、偉そうなことを言わない方がいいと思ってね。検事さんというのは、皆さん、ちゃんとした大学を出て、しかも難しい試験に合格した法律の専門家なんだ。その専門家が出した結論に、素人のあんたが文句をつけるなんて、どだい間違っているんだ」

「どういうことなんでしょう？ おっしゃっていることがわかりませんが……」

「わからない？ 面白いねえ。つまり、おれと議論がしたいというわけなんだな。それなら、これから教えに行つてやろうじゃないか。それでいいんだな。とにかく、近くに行つてから、また電話するよ。じゃあ、そのときに……」

「だめです。そんな……」

冴子は、あわてて言ったが、そのとき電話は切れてしまった。

電話が切れたあと、冴子の息遣いは早くなっていた。自分でもそれがわかる。冴子はベッドに腰を下ろし、右手を左の手首に当てて脈を測ってみた。思ったより規則正しく、しかも静かな脈拍が伝わって来る。

冴子は首をかしげた。不思議な気がした。脈拍が静かなのは、自分が落ち着いていることを示しているのか。

だが、本当はのんびりと落ち着いていられる事態ではなかった。そのことにも、冴子は気がついていった。

いまの電話の相手は、このアパートにやって来ると言っていた。どこまで本気なのかわからないが、単なるいたずらや威しとは言えない響きが、口調からは感じられた。

冴子は、首を伸ばしてドアに目をやった。鍵がかかっていることは、先刻も確認したはずだが、念のためという気持だった。

そうだ、鍵だけでなく、ドアチェインもかけた方がいい……。

冴子は、ベッドから滑り降りると、玄関に向かった。

そのとき、また電話のベルが鳴った。冴子は反射的に手を伸ばしかけたが、途中で思いとどまった。何はともあれ、ドアチェインの方が先だ。